連開庵の算額

連開庵は、宝暦13年（1763）顕宗が開山となって創建されたといわれています。連開庵では、天井が96に区切られ、それぞれに文字や絵が書かれていますが、その中に市内で確認されている算額34面のうち、３面があります。算額とは、神社や仏閣に奉納した数学の問題（大部分が幾何）や解法を書いた絵馬のことです。連開庵の算額は、北信地域のみに確認されている大変珍しい格天井算額です。

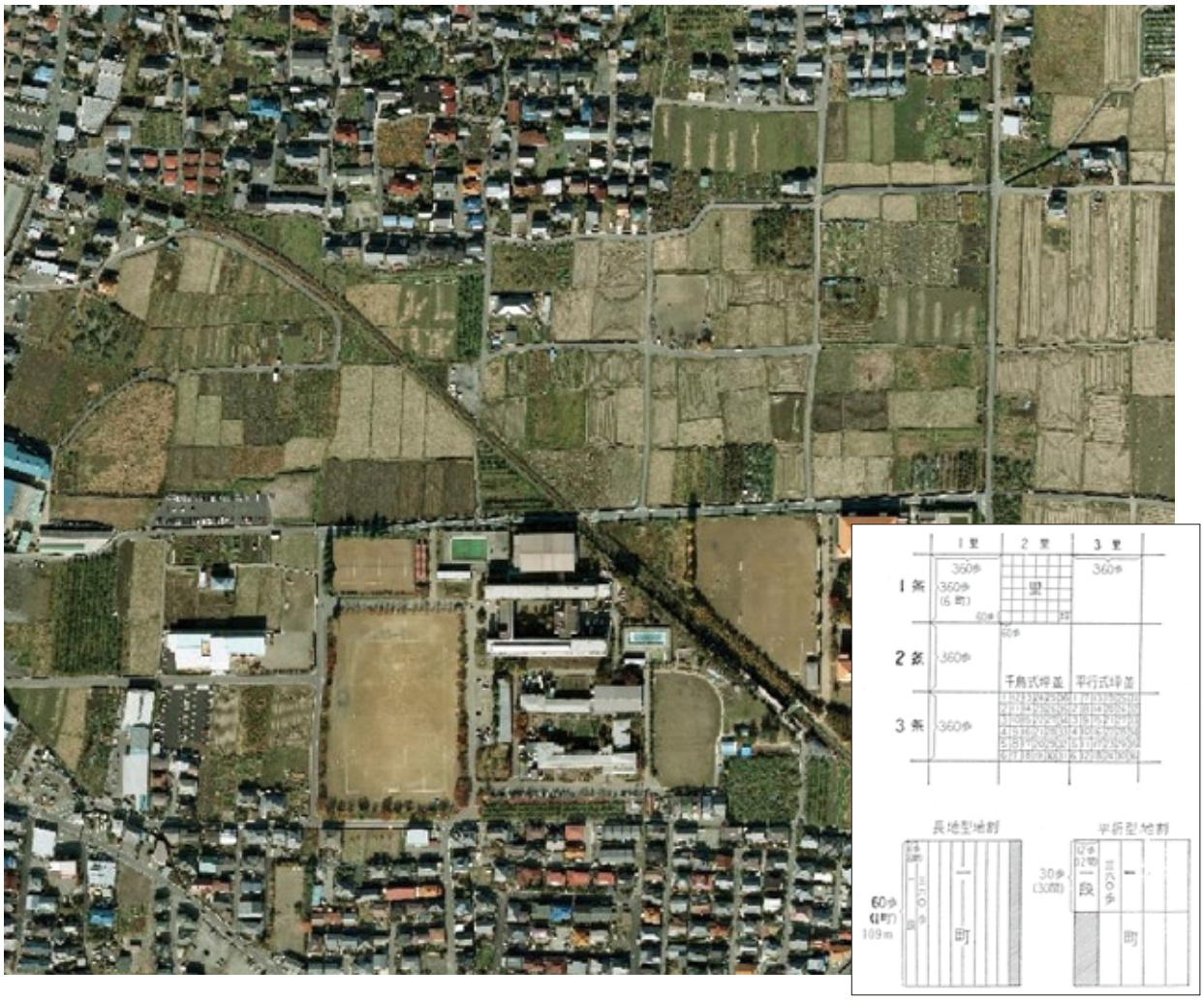
３面のうち２面は、嘉永６年（1853）、安政４年（1857）に、それぞれ地元の北尾張部の人が奉納したものです。他の１面もやはり地元の人の奉納ですが、年代・問題は不明です。３面は保存状態が良く、江戸時代末期の農民の教養の高さを示す貴重なものです。

八幡神社の俳額

八幡神社は、もと曹洞宗地蔵寺の境内にありましたが、天文３年（1534）現在地に移ったといわれています。この八幡神社には、信濃町出身の俳人小林一茶（1763－1827）が亡くなる数か月前の最晩年期の文政10年（1827）に選句し、奉納した俳額があります。この俳額には、一茶だけではなく、有力な弟子たちが顔をそろえて句を出し協力しており、一茶、最晩年期の北信・善光寺周辺の俳壇総顔見せといっても過言ではない貴重なものです。なお、八幡神社には、文政６年（1823）に奉納された俳額もあり、一茶自身による選句ではありませんが、こちらにも一茶の句が掲額されています。

地域の魅力再発見　朝陽地区

条里的地割遺構



北堀・南堀付近には、一町（約109m）間隔で東西・南北の方向に農道や畦道・用水路が整然と通る正方形の土地区画が見られます。これらは、奈良時代の律令国家が行った班田収授法による条里地割と直接結びつけることはできませんが、各地の同じような水田区画跡の発掘調査などから、平安時代以降に行われたものですが、奈良時代の条里地割と同じような土地区画であることが分かっています。

こうした土地区画は、かつて善光寺平の広範囲に及んでいましたが、宅地化が進み、年々消えていきました。そのなかでこの地域では、土地区画の跡が崩れず整然と残されており、現在の住宅街にも確認できる貴重なものです。

山千寺観音堂及び銅造観音菩薩立像

山千寺は、平安時代からの霊山のひとつである戸隠山顕光寺の末寺として、天文12年（1543）に開基されたといわれていますが、明治維新の神仏分離令で善光寺大勧進末寺となり、明治6年（1873）に廃寺となっています。現在の観音堂は、文政４年（1821）に建立されたもので、崖の上に石垣を組み、入母屋造の堂に縁を張り出す構造になっています。

山千寺には、県内最古の仏像であるとされている銅造観音菩薩立像があります。この仏像は、国の重要文化財に指定されており、全高29.6ｃｍ、７世紀後半（白鳳時代）の作といわれています。体に比して顔が大きく、手足が大きいことに特徴があり、写実を離れた面貌、花衣の形などに飛鳥仏の面影を残しています。

蚊里田八幡宮の例大祭と七反幟（のぼり）

蚊里田八幡宮は、仁平年間（1151-1154）の創立といわれ、若槻荘の総鎮守でした。現在の社殿は、文久2年（1862）再建で、御神体は、神功皇后が新羅遠征の際、安産を願って携帯せられたという「鎮懐石」です。毎年5月5日には、春の例大祭が斎行されており、七反幟が立てられ、子供相撲が奉納されるなど、大いに賑っています。

七反幟は、佐久間象山（1811-1864）の揮毫（きごう）によるもので、嘉永7年（1854）の書といわれています。幟には、「威稜扶宇宙（いりようううちゆうをたすけ）　嘉永甲寅春三月」「恩眷煦生霊（おんけんせいれいをくす）　象山平啓子明書」（武神八幡の威光は天下の隆盛を助け、その恵みは氏子である百姓を、温かく慈しみ潤している）と書かれています。例年は若槻東条出身の高弟花岡馥斎（ふくさい）の筆による七反幟が立てられており、象山の筆による七反幟は社宝として大切に保管されています。

粟野神社と祭神

粟野神社は、「延喜式」（平安時代中期に編纂された律令の施行細則）神名帳登載の古社であり、水内郡九座のうちの一小座といわれています。旧記神宝は、永禄年間（1558-1570）に、甲越交戦の際、兵火にかかり消失したと伝えられています。諏訪明神と称していましたが、天明６年（1786）に正式に社名を認可され改称しました。豊野町石の粟野神社と論社となっています。

神社再建の時、北国街道に面して西向きに建てられており、大変珍しいとされています。

祭神の少彦名命（すくなひこなのみこと）は粟を生んだ神であり、地名の上野は粟野の転化であるといわれています。

長沼神社 武田信玄奉納獅子頭

長沼神社は、長沼の里が開かれた平安時代に創建され、以来この地の守り神として多くの人たちから崇敬されています。もとは諏訪大明神と称していましたが、文化５年（1808）現社号となりました。

永禄11年（1568）武田信玄（1521-1573）は、神徳の篤き神社として崇敬し神殿を再建し、木像・笛・獅子頭・薙鎌を奉納しました。また、信玄自ら欅２本を植えました。そのうち、現存するのがこの獅子頭です。川中島の戦いの時、長沼の地は武田軍・上杉軍の前哨地帯でしたので、武田軍は長沼勢を味方に引き入れるために、長沼神社を取り込んでおり、戦略的な要素もあったと考えられています。

閻魔（えんま）大王・葬頭河婆（そうづかばば）・地蔵菩薩

差出北公民館には、閻魔大王・葬頭河婆・地蔵菩薩の三体の仏像が安置されており、通称「閻魔堂」と呼ばれています。

このうち、閻魔大王（写真中央部）は、天文３年（1738）に京都の木喰仏師桜井によって造顕され、赤い顔面や道服の模様は明治33年（1900）に彩色されたといわれています。高さ93㎝の座像で一本の木で造られ、手は別の木で造られ取り付けられています。

葬頭河婆（写真向かって右）は、高さ40㎝の像で大きな口を開け、細く小さな立膝の足が不調和で恐怖心をそそります。地蔵菩薩（写真向かって左）は、高さ93ｃｍの立像、微笑を浮かべた丸坊主の童顔で、子どもたちを守り救う仏として庶民信仰があついものです。

太田沢の赤地蔵

安茂里西河原区と小路区の境を流れる太田沢の橋上に、天保10年(1839)に作られたといわれる、全身を赤く塗ったお地蔵さんがふくよかな顔で合掌しています。

死後、地獄へ送られた亡者はひどい苦しみにあうといわれており、その苦しみから救っていただこうという願いから、昔、このお地蔵さんは太田沢の下流にできた火葬場の隣に祀られていました。その後、火葬場の移転に伴い黄金沢の私有地へ移されたところ、移転にかかわった村人たちが次々と腹痛を起こしたため、お地蔵さんのたたりかと思い、修験者に占ってもらい、現在の場所に安置されました。赤く塗られているのは、お地蔵さんの力がさらに強くなるからだろうといわれています。

地域の魅力再発見　小田切地区

小田切八景

明治44年に、小田切小学校同窓会7周年記念事業として地区住民が選定した小田切地区の八箇所の名勝です。それぞれに県歌「信濃の国」の作詞者として有名な浅井洌による詩情豊かな和歌が添えられています。

“両郡橋の帰馬”

ー駒引いてとどろと渡る犀川の
夕日色どる虹の長橋ー

両郡橋の名は、上水内郡と更級郡に架かることに由来しています。最初の橋は周辺住民等の寄付により明治11年(1878)に架けられました。

“小野平の晴嵐”

ー打ちわたす尾上の松に立ちなびく
嵐のかけし秋の朝ぎりー

小野平は、善光寺平の眺望が素晴らしい景勝の地で、付近には鬼女紅葉伝説に因む老樹「余五将軍（平維茂）駒つなぎのイチイ」や急勾配の屋根が印象的な古刹、浄蓮寺があります。

“三かまど神社の仙境”

ー三かまどの神の宮居は世の中の
ちりも及ばぬ所なりけりー

裾花大橋の南に位置する三かまど神社は、お善鬼様として地域住民に親しまれてきました。神社の名の由来といわれる近くの三つの洞穴は虫倉山まで通じているという伝説があります。

“七ッ石の落雁”

ー秋風にふきおくられて遠つ人
常世の雁の声ぞ落ちくるー

七ッ石は、小田切滝沢から戸隠に至る古道「馬神道」沿いにある、犀川を望む静かな景勝地で、周辺には馬神古墳等があります。

小田切八景

“三福寺の晩鐘”

ーかげろひの夕日かたぶく山寺の鐘の音より
暮れそめにけんー

三福寺は、情緒ある鐘楼が来訪者を迎えてくれる静かな山寺です。明治初期にはここに「万綏学校」が開かれ、のちの公立学校の前身となりました。

“城山の秋月”

ーあとふりて松風寒き城山の
昔を語れ秋の夜の月ー

「城山」は、戦国時代の山城、吉窪城址のことで、付近の吉窪古墳とともに史蹟として有名で、今も空堀や土塁が残っています。

“水内鎮神社の夜雨”

ーみ社の老木の森はものふりて
淋しさそふる夜半の雨かなー

水内鎮神社は、御柱祭で有名で、平成16年に行われた祭では地元住民に加え小田切園の園生や職員も参加し伝統の祭を盛り上げました。

“富士の塔の晩霞”

ー咲く花を風の心にまかせじと
山たちかくす夕かすみかなー

富士の塔は川中島平や飯綱山等を一望できる景勝地で、「ふれあい夢の塔」や旧小田切村立小鍋尋常小学校の玄関の一部を移設した休憩所等があります。